

## 山口啓介の新作に関する考察

北谷正雄

豊田市美術館は、開館20年を迎えるのを機に建物のバリアフリー化、延命化を主とした改修工事を実施し、2015年10月にリニューアルオープンした。そしてこのリニューアル後、第2回目の展覧会として「山口啓介 | カナリア」を開催した。もともと豊田市美術館では、山口の初期の代表作である大型版画3点をコレクションしており、いずれかの時期にこの作家を取り上げた展覧会を開催するのは美術館の本旨にかなうものとして望まれていた。さらに、改修工事に伴う1年余りの休館期間中に、館外活動として山口の作品《カセットプラント》を制作するワークショップを美術館が立地する豊田市内の交流館（公民館）や小中学校で実施することになり、その成果を展示する場としての展覧会が必要であった。実際、ワークショップで参加者が制作した《カセットプラント》の展示は、美術館2階の高さ9.6mの吹き抜け空間のガラス壁面に幅20mにわたって貼り付けられた巨大なもので、山口自身が制作した作品と合わせて、その数約50,000個のカセットが観覧者を圧倒する本展覧会の見どころの一つであった。

こういった、ある意味では必然的な要請で開催されることになった今回の山口の個展だが、その企画の根底には美術館のコレクションとなっていた初期の大型版画があったことは忘れてはならない。その作品とは1990年の《炭素の船》と《四つの黒船》、そして91年の《RNA World - 5つの空 5つの海》である。山口の作家としての評価は、これらの3点を含む1990年前後に発表された大型版画で定まったと言ってもよいだろう。それらは、版画という概念を超えた作品の大きさ、まるで絵筆の跡が残る厚塗りの絵画作品のようにインクが盛り上がった画面の仕上げなどが全く新しい表現を見せているだけでなく、人類、さらには地球の歴史に対する雄大な眼差し、我々自身が生きる社会や自然に対する繊細な感覚が、版画や絵画などというジャンルの枠を超えた奥深さを持って作品を際立たせ、作家自身の思想を明快に、そして力強く伝えている。

いわゆる現代美術の作家たちの例に漏れず、平面や立体などジャンル間を行き来して多彩な表現も試みてきた山口であるが、そのキャリアを見てみると、初期の大型版画に始まり、その後は、素材の選択に作家ならではのこだわりを見せつつも、一貫して平面作品、とくに絵画作品がその活動の中心にあったと言えよう。そしてまた、様式あるいは主題においては、抽象的な表現が溢れている現代の美術界においては珍しいと言ってよいほどはっきりと具象的な作風を見せる作家である。それはとりもなおさず、この作家が、良い意味で純粋無垢に絵画の可能性を信じ、そして常に何らかの物語を紡ぎ出し、我々に送り届けようとしているということだろう。ところで、今回の展覧会のタイトルである「カナリア」とは、アメリカの小説家カート・ヴォネガットが唱えた「坑内カナリア芸術論」に由来する。ヴォネガットは、「アメリカ物理学会での講演」で科学者たちに対して、芸術家の有用性とは感受性の強さにあり、炭鉱のカナリアが有毒ガスをいち早く感じ取るように、社会において敏感に危険を察知する者として、芸術家と社会との関わりを端的に述べている<sup>1</sup>。確かに、



図1 《炉心強／翼のゆくえ 山水の構造1》 2015年

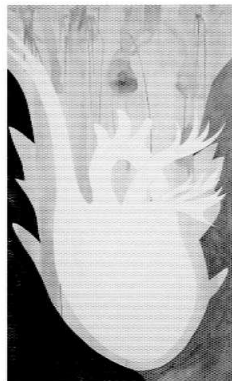


図2 《原 - 翼のゆくえ 山水の構造2》 2015年



図3 《火と水の間／翼のゆくえ 山水の構造3》 2015年



図4 《天秤座の翼 山水の構造4》 2015年



図5 《心臓の archetype》 2015年

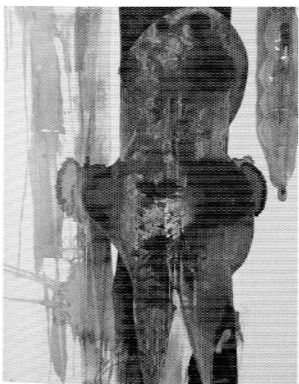


図6 《朱色の人》 2015年

山口の初期の作品には原子力や核の問題を取り上げたものも少なくなく、さらには近作でも東日本大震災と原子力発電所の事故に触発された作品を数多く制作している。

山口啓介は、自身が生きるこの世界の出来事に敏感に反応し、それに対する自身の理解のあり方を作品として提示している。我々は、そのような山口の作品と対峙することで改めて身の回りの社会の状況に思いを至らせ、気づきを得ることになる。また山口は、自身の考えのありようを絵画化するために、ある特定の、自身の気にかかり、心に留まったかたちを繰り返し用いている。そしてそのかたちはさまざまな意味を持ちながら、山口の作品を多様に展開させている。本稿では、山口の作品に見られるこういった特徴を、特に今回の「山口啓介 | カナリア」展に出品された新作について論じながら、明らかにしたい。その際、同時に見渡されるのは、初期作品から見られる神話、歴史、いのち、自然、そして自身が生きる社会といったものに対する作家のまなざしである。

\*\*\*

今回の「山口啓介 | カナリア」展のために制作された新作は6点。《炉心臓／翼のゆくえ 山水の構造1》(図1)、《原-翼のゆくえ 山水の構造2》(図2)、《火と水の間／翼のゆくえ 山水の構造3》(図3)、《天秤座の翼 山水の構造4》(図4)、《心臓の archetype》(図5)、《朱色の人》(図6)である<sup>2</sup>。タイトル、モチーフなどを見れば明らかに《朱色の人》とそれ以外の作品とに分かれよう。それら5点に多用されているのは、タイトルには「心臓」、「翼」、「山水の構造」といった言葉、モチーフには「心臓」や「翼」などのかたちである。これらの作品について、順に見ていくことにしよう。

はじめは、タイトルにつけられた番号をたよりに《炉心臓／翼のゆくえ 山水の構造1》から。縦長の画面の中央に、心臓のかたちが大きく真っ白に描き出されている。そこからは太い管が伸びていて、先端の細く湾曲したかたちが、血管がその先へと途切れずにつながっていく様子を伝えている。心臓の周囲はやや赤みがかった肌色が縁取っているが、よく見ればそれが画面の最下層に地塗りのように塗られているのが見て取れる。そしてその肌色の地塗りを間において、緑色の部分が心臓のかたちをなぞるように、左右と下の画面の端まで塗り込められている。この緑色は左右で明るさの異なる色が使われていて、それぞれの色面のなかでも濃淡を使い分けながら塗られている。その緑の面の心臓のかたちを囲む線は、左右ともところどころに切り込みがあり、それが翼のかたちを表しているのが分かる。画面の上端には、同じく濃淡のある緑で塗られた左右に細長い帯があり、その上辺は山並みを表すように緩やかに波打っている。そして、この緑の帯と心臓との間の肌色の部分には、透けるほど薄く溶かれた緑や黄色、肌色が画面上端から垂れ流すように細長い線状のかたちで塗られている。また、それとは別に赤や明るい肌色が斑点状に、一部は

